

かながわの学習資源に関する研究

— 歴史・文化等を中心としたデジタル教材開発 中間報告 —

荒川 憲行¹

これからの国際社会を生きる日本人として、生徒が日本の伝統・文化を尊重し、それらをはぐくんできた国や郷土に関心を高め、理解を深めることは重要な課題である。その課題を解決するために、まず生徒にとって身近であり日々の生活の基盤である「かながわ」の学習資源に関する資料の調査・収集を行った。そして、その学習資源を活用して「かながわ」の特色をつかめるようなデジタル教材の開発を行った。

はじめに

これからますます進展する社会の国際化に伴い、生徒が日本人としての自覚を持って国際社会で生きていくためには、他国を尊重し国際社会の平和と発展に寄与していく態度を養うことと同様に、国や郷土の歴史・文化・伝統に対する理解を深め尊重する態度を養うことが大切である。その重要性は平成 18 年 12 月の教育基本法の改正や、平成 19 年 6 月の学校教育法の一部改正の中でもうたわれている。

こうした状況の中で、教科等の指導で教員が生徒に国や郷土に関心を向けさせ、理解を一層深めさせることは今後更に必要となる。

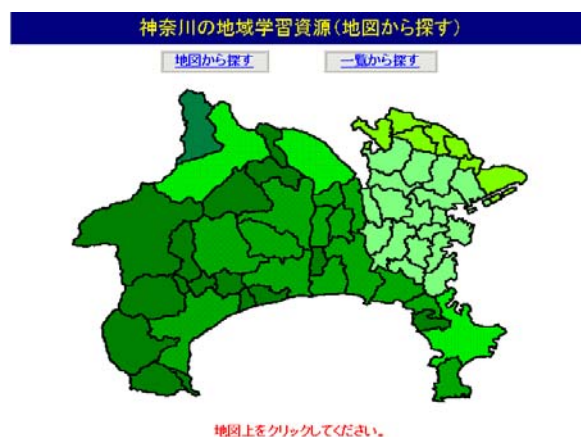
そのために、まずは生徒が身近な郷土に興味を持つような教材が必要である。総合教育センターでは、平成 14 年度より神奈川の文化財や自然を生かしたデジタル教材やその指導法に関する研究、博物館を活用した教材開発研究を行い、平成 16 年度にデジタル教材「都市横浜の歴史」(DVD)を作成した。(第 1 図)



第 1 図 デジタル教材「都市横浜の歴史」

また、市町村の教育研究所等においては、地域の学習資源を取り上げた副読本や資料集などが作成されている。そのコンテンツを Web 上で公開している市町村も多くあり、それらは授業等で活用できるようになっている。

そこで、総合教育センターでは、平成 17 年度に小・中学校でのデジタル教材の活用に向けた神奈川の学習資源の調査研究を行い、「神奈川の地域学習資源リンク集」(<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/chiki/>)を作成した。これはデジタル教材をリンク集としてまとめたものである。県内の学習資源を広く簡単に活用できるようにするため、神奈川県内の地域図から各地のデジタル教材を参照できるようにした。(第 2 図)



第 2 図 地図からの検索ページ

このように、県内各地域の学習資源を扱った教材は多く存在し、児童・生徒が「郷土学習」として、生まれ育った地域周辺を学ぶことは多い。しかし、小・中・高等学校を通して神奈川県を単位として学習する機会は少なく、県全体を視野に入れた「かながわ」の特色を学習できる教材は非常に限られているのが現状である。

平成 19 年には「かながわ教育ビジョン」が策定され、「第 5 章 重点的な取組 VIII. 学びを通じた地域の教育力の向上」では、神奈川の魅力に基づく「かながわ学」の発信がうたわれており、「かながわの自然や歴史・風土、文化芸術、産業や観光などを背景にした各地域の様々な活動等を『かながわ学』として発信」(神奈川県教育委員会 2007)するとしている。これからは、様々な角度から「かながわ」の独自で多様な学びを創

1 カリキュラム支援課 指導主事

出していくことが重要なテーマとなる。また、神奈川県では県立高等学校における日本史に関する科目の必修化に向けて独自の取組を始めており、新たな学校設定科目として「神奈川の郷土史を学習する科目」が創設される予定である。

以上のように、地域単位にとどまらず「かながわ」全体を見据えた教材開発が、喫緊の課題となっている。

なお、本稿では、行政区域を示す場合は「神奈川」と表記し、神奈川県域を中心とした文化的地域や県域周辺を含むものは「かながわ」と表記した。また、過去の総合教育センターの研究集録等で参考にしたものについてはその表記に従った。

研究の目的

本研究は平成20・21年度の二年計画である。

本研究の目的は、生徒にとって身近であり日々の生活の基盤である「かながわ」の歴史・文化等を中心に「かながわ」全体を一つの地域としてとらえ、その特色を学習させるデジタル教材を開発することである。そして、その教材の効果的な活用例や学習指導例を提供することで、生徒が教科等の学習目標を達成し、神奈川県内の歴史・文化等に対して、より一層興味・関心を高め理解を深めることを目指すものである。

研究の内容

本研究は、次のような内容で研究を進めることとした。

- ・デジタル教材開発の目的・方向性及び開発に係わる諸課題の整理
- ・学習資源を活用した教材に関する県内及び県外における取組の調査とその整理、資料収集
- ・地域調査や、博物館等との連携・協力を視野に入れた資料収集
- ・取り上げる学習資源に関する解説等の執筆と内容の検討
- ・デジタル教材の内容の検討及び整理
- ・授業実践を通じたデジタル教材のより効果的な教材活用例及び指導事例の開発と検証

開発する教材は歴史・文化等を主に扱うが、地理歴史科だけではなく、国語科など幅広い教科での活用についても検討することにした。

研究の一年目に当たる今年度は、デジタル教材開発の目的・方向性を決定して諸課題を整理し、「かながわ」の“道”を通じた各時代の生活・文化・産業・政治的事象等をテーマとして取り上げた。“道”を取り上げた理由は、各時代には代表的な“道”があり、それらは人々の生活・文化・産業等と密接に関係している。生徒にとって身近であり、かながわ全体を見通し

た学習をするのには適した題材であると考えたからである。そして、地域調査や様々な機関からの資料収集を中心に研究を進め、時代ごとの道や交通を通して、各時代の「かながわ」の特色をつかめるデジタル教材の開発を目指した。

1 地域教材の活用について

今年度は、主に高等学校での教科等における活用を念頭に教材開発を行っている。例えば、現行学習指導要領の日本史Aでは、「2内容(1)歴史と生活」の中で、「交通や通信の変化がどのような時代的背景の下でもたらされ、それが人々の日常生活にどのような影響をもたらしたかを追究させる。」「地域社会がどのように変化してきたかを、政治的、経済的な条件や国際的な動きと関連付けて追究させる。」とある。

日本史Bでは、「2内容(1)歴史の考察」の中で、「文化の特色、人々の生活、都市の形成、他地域との交流などに着目して、日本列島の諸地域における歴史の差異について追究させる。」「人々の生活の変化に着目して、各時代における産業や生活の中の技術、交通、情報などの発達や教育の普及の影響について追究させる。」とある。

地理Bでは、「2内容(2)現代世界の地誌的考察」の中で、「直接的に調査できる地域の特色を多面的・多角的に調査して、日常の生活圏、行動圏の地域性を地誌的にとらえさせるとともに、日本又は世界の中から同規模の地域を取り上げて地誌的に考察し、それらを比較し関連付けることを通じて市町村規模の地域を地誌的にとらえる視点や方法を身に付けさせる。」とある。

本研究で開発した教材は、上記いずれの科目においても学習指導要領の目標・内容にのっとって適宜活用することが可能である。ここでは、地理歴史科の科目を例に挙げたが、他の教科・科目等における活用についても今後検討していきたい。

2 デジタル教材開発について

(1) デジタル教材(DVD)作成の意義

デジタル教材は、教科等の学習目標を達成することにつながり、神奈川県内の歴史・文化等に対する生徒の興味・関心を高め理解を深めることに役に立つものでなければならない。また、教員にとっても授業等でデジタル教材を活用することが、生徒の理解や考察を深める指導において有効であるものでなければならない。

デジタル教材を授業等で活用した際の効果については、「ICT活用による学力向上の証し—実証授業による指導の効果検証結果の報告—」(独立行政法人メディア教育開発センター 2007)によれば、ICTを活用することにより授業に対する児童・生徒の興味・意欲、満足度が高まるとともに、「正しく理解することがで

きた」や「深く理解することができた」「内容を先生や友だちに正しく説明できる」など、知識・理解に関する項目についても ICT 活用の効果が示されたとしている。また、ICT を活用した授業に対する教員の評価として、95 パーセント以上の教員が ICT の活用について効果を感じ、90 パーセント以上の教員が、「効果的に活用できた」「指導が変わった」「授業の質が向上した」「授業改善ができた」と回答している。ICT を効果的に活用することによって、授業の質を高め、授業の改善に役立つと感じているのである。

そこで本研究でも「かながわ」の学習資源を活用してデジタル教材を開発することとした。

今年度テーマとして取り上げた“道”を授業等で扱う場合、生徒が道を訪れ古地図などにある過去の道と現在の道の状況を比較しながら実際に歩いてみたり、博物館等に行き、関係の資料を読み、実物に触れる等の調べ学習をしたりするなどのフィールドワークを行って、実際の体験を通して学習することが非常に効果的な方法である。しかしながら、広範囲の移動に伴う時間・費用の面などの制約を考えると、何度もフィールドワークを実施することは現実的に困難である。体験学習の有効性を補い、実体験に近い形で学習することが可能なデジタル教材を活用することは、生徒の理解や考察を深める上で大変有効である。

教員にとっても、生徒とともに体験学習等を実施することで効果的な指導ができるが、事前の準備・調整等には多くの時間が掛かる。また教員自身が教材を開発するとなれば、素材となる資料を収集しなければならない。教材開発のためには複数の機関から多くの資料の提供を受ける必要があり、利用の手続きなどの調整に時間を要する。さらに、それをデジタル化し教材化するまでの労力を考えると、総合教育センターが調査研究協力員の協力を得て、汎用性があるデジタル教材を作成・共有することには十分価値がある。

また、学校における情報機器や通信ネットワークの整備・普及などが年々進み、総合教育センターの ICT を活用した授業づくりに関する研修などを通して教員のコンピュータスキルも向上しつつあることから、授業等におけるデジタル教材の効果的な活用が期待できる。

以上のことから、「かながわ」の学習資源を活用したデジタル教材の作成は、大変意義あるものと言える。

(2) デジタル教材作成上の課題

研修などを通して教員のコンピュータ操作に関するスキルが向上しつつあるが、デジタル教材は操作が複雑であったり使用に際して手間がかかったりするコンテンツでは普及は望めない。専門的な知識がなくても使用でき、操作性が良いものでなければ、いくらデジタル教材の内容が素晴らしいものであっても教育現場では広く活用されることはないであろう。できるだけ

多くの教員に開発教材を活用してもらうためには、作成の際にどのようなソフトウェアを使用し、また各コンテンツをどのような構成にするかなどを十分に検討する必要がある。こうした点を考慮して、現在デジタル教材開発を進めているところである。

3 資料の調査・収集について

“道”は時代を横断して存在しているが、各時代には人々の生活・文化・産業等と密接に関係している代表的な“道”がある。その“道”を軸として、各時代の「かながわ」とはどのような地域だったのかを探ることのできる構成とした。次が時代区分とそこで取り上げた主な“道”である。

- ・古代 古東海道（足柄道など）
- ・中世 かまくら道
- ・近世 東海道一大山道・江の島道・金沢道・浦賀道
- ・近代 鉄道

市町村の教材を参考に、現地調査・博物館等との協力を通して、これらの“道”に関する資料の調査・収集を進めた。

(1) 市町村の教材

本研究を進めるに当たっては、まず各市町村の教育研究所等が作成した児童・生徒向けの地域の学習資源を扱った副読本や資料集を調査・収集した。副読本や資料集を基にして、写真や統計・地図等を中心に解説を加えたり、クイズ形式で地域学習の理解を助けたりするコンテンツを Web 上で公開している市町村も多々ある。これらの資料は学習資源として貴重であるばかりでなく、教材として実際に授業で活用されているものなので、教材開発の面からも参考とした。

(2) 現地調査

本研究では調査研究協力員 6 名（高等学校の地理歴史科教員）の協力を得た。各自が担当する“道”に行き、寺・神社・道標・鉄道駅・歴史遺跡など、テーマに沿った学習資源として有用と思われる対象をデジタルカメラ等で撮影し、地域調査及び資料収集を行った。

(第 3・4 図)



第 3 図 調査研究協力員撮影の現地写真
(足柄道からの風景)



第4図 調査研究協力員撮影の現地写真（金沢道）

(3) 博物館等との連携・協力

資料収集に関しては、実際に地域へ行き調査をするだけでなく、調査研究協力員及び総合教育センター所員が博物館・郷土資料館等に出向いて、必要資料を収集した。

博物館などの施設が保管する文化財等を調査・見学し、学習に活用することは、現行学習指導要領にも記されている。高等学校学習指導要領の第2章2節地理歴史科では、「博物館などの施設や地域の文化遺産についての関心を高め、文化財保護の重要性について理解させる。」「地域の史跡や諸資料の調査・見学などを取り入れるとともに遺物、伝承などの文化遺産を取り上げ、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること。」（日本史B「2内容及び3内容の取扱い」から抜粋）などとしており、教員だけでなく、生徒の調査・学習においても博物館などの施設の有効活用は今まで以上に取り組むべき重要な課題である。

神奈川県には価値ある文化財等が豊富に存在するが、現状ではまだ十分に活用されているとはいえない。博物館などの機関は、学習資源に関する数多くの有用な資料を所蔵しているが、そればかりでなく文化財等に関して専門的知識を有する学芸員がいる。

文化財等の資料は、学芸員にとって学術的研究の対象や社会教育の教材であるが、教員にとっては多くの場合、学校教育の場で教材として利用するものである。本研究では、「専門的立場からの適切な助言や所蔵資料の紹介などの協力を得るためには、どのような発達段階の生徒に、どのような学習をさせたいのか、また教科書等の既存の教材にはどのようなものがあり、どのように記載されているのかなどを明らかにし、協力を求めるべきであろう。」（水野 2003）の指摘を踏まえて、博物館等との連携・協力を行った。

本研究の目的や作成しようとするデジタル教材の意図をしっかりと伝えることにより、学芸員から所蔵する資料の提供のみならず、関連した資料に係る情報や文化財等に関する適切で専門的な知識や助言を多く得

ることができた。今後は、より一層の連携・協力関係を築き、研究内容を深めていきたいと考えている。

また、生徒が「かながわ」の歴史や文化等に興味を持ち、自ら主体的に学ぶ姿勢を身に付けると、博物館等は生徒にとって正に物的・人的な学習資源そのものになりうる。その存在と利用価値を知り、実際に足を運んで様々な資料を見たり触れたりして体験を通じた学習をすることは、生涯学習という観点から見ても大変有益なことであると言える。

なお、博物館の活用に関しては「デジタル教材 都市横浜の歴史」にある「平成16年度 他機関等連携研究事業 博物館を活用した教材開発研究の概要～デジタル教材『都市横浜の歴史』について～」（総合教育センター 2005）に詳しい。

(4) 調査・収集した資料について

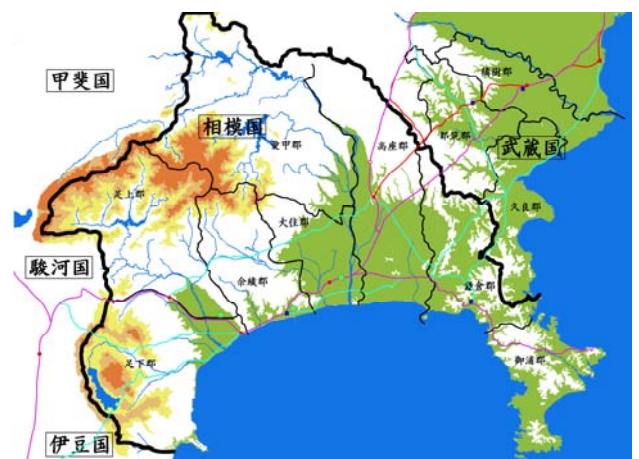
今年度は、「かながわ」の“道”を通して各時代の生活・文化・産業・政治的事象等を考察することのできる内容とするための資料の調査・収集を中心に研究を進めた。次がその概要である。

ア 古東海道

一般的に日本の古代道は、飛鳥時代から平安時代前期にかけて計画的に整備された道路を指す。

律令制下の古代道には、人・情報が移動する道の役割があり、都から地方への緊急連絡の早馬、公文書の通送、重要な公務の官人の旅行などに使用された。さらに西への移動には「防人（さきもり）」の往来があった。また、律令制の下では農民には「租庸調」の税負担が課せられ、物資を運ぶ道としても使われた。

このような古代道の在り方を通じて、古代の「かながわ」を考察するための資料として、木簡の写真、遺跡や発掘現場の写真、文書史料などを調査・収集した。



第5図 総合教育センター所員作成による古代の道の示し方の例

イ かまくら道

かまくら道とは鎌倉街道とも呼ばれ、関東地方を始め各地の武士たちが、「いざ鎌倉」という場合に使った

道の総称を言う。大きくは「上道（かみのみち・かみつみち）」、「中道（なかのみち・なかつみち）」、「下道（しものみち・しもつみち）」の三つに区分される。

道の中には現在では廃道になっている所もあり、現在かまくら道とされているルートは必ずしも正確なものではなく、そのルートよりも通過している点（地域）の方が大切である。武士や僧侶、旅人といった人間の往来以外に年貢や特産物などの物資が盛んに運ばれたこの道の近くには、武士の館や寺、神社あるいは市や宿場などが多く見られ、当時その地域の中心になっていたと考えられる。

このほか、御家人たちには、戦争以外にも「鎌倉番役」といって順番で鎌倉の警備をする義務があり、そのための往来にも使われた。

また鎌倉時代は、民衆による仏教の信仰が篤かった時代である。いわゆる鎌倉新仏教だけでなく、真言宗・天台宗・律宗などの僧侶も布教のために、かまくら道を利用した。

このようなかまくら道の在り方を通じて、中世の「かながわ」を考察するための資料として、鎌倉幕府跡の写真、寺・神社の写真、中世市街地の発掘現場の写真、代表的な武将に関する史料などを調査・収集した。

ウ 近世の道

東海道には江戸日本橋から京・三条大橋に至るまで五十三の宿場があったが、そのうち神奈川には九つの宿場があった。参勤交代では東海道を利用した大名は全体の半数以上にのぼり、近世の五街道の中でも最も重要な道であった。また箱根には関所があり、通過する際の厳しさは有名であった。それは幕府にとって関東地方の出入り口として最も重要な役割を持つ関所であったからである。

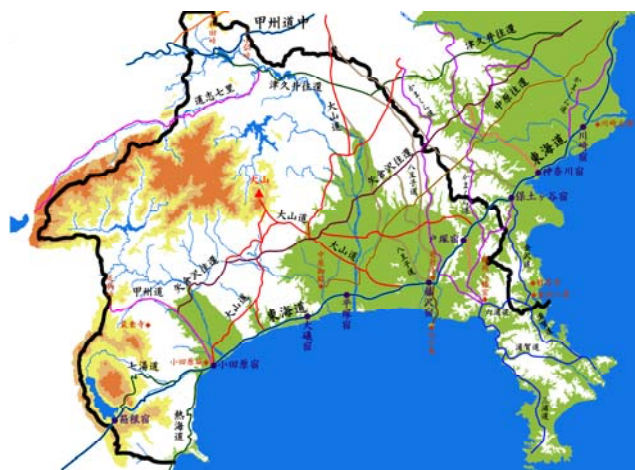
(ア) 大山道・江の島道・金沢道

近世は、幕府により街道が整備され、人々の往来や物資の移動が盛んになった。それは経済を発展させる効果をもたらすとともに、様々な情報の伝播などにより文化活動も盛んになった。神奈川の宿場では、江戸文化が流入して文化の発信地ともなっていた。近世はまた寺社参詣や遊山（ゆさん）の旅が盛んに行われた。その代表的なものが大山道や江の島道、金沢道である。

(イ) 浦賀道

浦賀道には東海道の戸塚宿と保土ヶ谷宿から延びる二本の道がある。江戸時代の浦賀奉行所設置以来、江戸の経済的・防備的玄関港である浦賀と江戸を結ぶ役割や日本近代の幕開けを告げる重要な道として機能した。

これら諸道の在り方を通じて、近世の「かながわ」を考察するための資料として、浮世絵、絵地図、古文書などを調査・収集した。



第6図 総合教育センター所員作成による近世の道の示し方の例

エ 鉄道

近代における鉄道の主な位置付けは、国家から見ると軍事と産業であり、庶民から見れば通勤と観光である。

(ア) 軍事

日本初の鉄道は、1872（明治5）年の開業後すぐに、1877（明治10）年の西南戦争で大きな力を発揮し、その後横須賀線が敷設された。1894（明治27）年に始まる日清戦争で、鉄道は更に必要性を増していく。神奈川県内では横浜駅のスイッチバックを解消するため、神奈川一程ヶ谷間に直通線を敷設し、兵力の動員輸送を効率化した。

(イ) 産業

東海道線が全通すると、日清戦争後の産業革命の進展の中で、東海道線沿線には多くの企業や工場ができ、その輸送力に大きな期待が寄せられた。川崎・横浜にまたがる工業地帯が形成されると、原料、燃料、製品の輸送に必要な線路網が形成された。並行して横浜港の築港工事に伴い臨港線が建設された。また、大都市における建築素材としての砂利輸送線も建設された。

(ウ) 通勤

工業化の進展に伴い、労働者の通勤手段として鉄道は庶民にとって欠かせないものになる。1930年代後半以降、沿線の工業化と住宅化の進展を背景に旅客輸送の重要性が高まり、都市における通勤輸送の比重の高い鉄道へと性格を変えていった。

(エ) 観光

江戸時代の庶民は、信仰のための小旅行だけが許され、大山詣りや大山から江の島、鎌倉への経路は人気であった。明治時代になってもこのルートは観光コースとして人気を博した。そして、鉄道により利便性の増した江の島、鎌倉や箱根は、在留外国人も多く訪れる国際的な観光地となっていた。

このような近代鉄道の在り方を通じて、現代につな

がる「かながわ」の様子を考察するための資料として、当時の写真、路線図、絵葉書、観光案内図等を調査・収集した。

県立川崎高等学校 白川 重敏
[助言者]
日本大学 関 幸彦

研究のまとめ

本研究の一年目となる今年度は、「かながわ」の学習資源を活用した教材開発の目的及び方向性を明確にし、デジタル教材活用の有効性や作成上の課題を検討した。そして地域調査や、博物館等からの資料収集を主に行った。博物館等の多大な協力により、数多くの貴重な資料を収集することができたので、引き続き一層の連携・協力をしながら資料の収集に取り組み研究を進めていく。

来年度は調査研究協力員の協力を得て、教材開発案を検討し、授業実践等を通じた効果的な教材活用例・指導事例を含めて教材としてコンテンツにまとめていき、さらに、画像の提示・表現方法や各コンテンツの構成の工夫、解説資料なども検討し、デジタル教材の完成を目指す方向である。

そして教材を活用することにより、生徒の「かながわ」に対する興味・関心を高め、理解を深めることはもちろんのこと、各々の生徒が、それぞれの時代の「かながわ」のイメージを持つことができるようにしたいと考えている。このことは、平成19年に策定された「かながわ教育ビジョン」にあるかながわの魅力に基づく「かながわ学」の発信にもつながるものである。

おわりに

今年度は高等学校の地理歴史科を念頭に置いた“道”をテーマとした研究であったが、来年度はかながわの伝承・伝説、歌枕等文学ゆかりの地名や遺跡、外国人から見たかながわ等、国語や外国語など幅広い教科で使用できる題材について検討する予定である。また、神奈川県立高等学校における日本史に関する科目の必修化に伴い、新たに創設される「神奈川の郷土史を学習する科目」も視野に入れながら、デジタル教材の完成に向けて更なる研究や開発に取り組んでいきたいと考えている。

最後になるが、日本大学の関幸彦先生には、ご多忙にもかかわらず、本研究のスーパーバイザーとしてご助言を頂き、心よりお礼申し上げます。また、調査研究協力員の方々にも感謝申し上げます。

[調査研究協力員]

県立藤沢総合高等学校	峰 治
県立神奈川総合高等学校	坂井 久能
県立横須賀高等学校	中根 淳一
県立保土ヶ谷高等学校	新谷 桂
県立足柄高等学校	熊谷 正己

引用文献

神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」
p. 57
水野治 2003 「地域の学習資源の活用」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第22集) p. 89

参考文献

神奈川県立総合教育センター 2005 「デジタル教材 都市横浜の歴史 『平成16年度 他機関等連携研究事業 博物館を活用した教材開発研究の概要』」
首相官邸 1999 「ミレニアム・プロジェクト(新しい千年紀プロジェクト)について」
<http://www.kantei.go.jp/jp/mille/index.html>
(URLは2009年2月取得)
独立行政法人メディア教育開発センター 2007 文部科学省委託事業「ICT活用による学力向上の証し—実証授業による指導の効果検証結果の報告—」
阿部直彦 2006 「神奈川の学習資源をいかした授業づくり」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第25集)